

随筆・評論

竹中圭子
藤本弘子
山口一選

特選

見送る人

田中恵子

十一月中旬の天気の良い日の朝のことだ。青空を見上げた時、大津へ行くと思った。十八歳年上の友人を訪ねるためである。

今、JRの最寄り駅の下りホームに立っている。普通電車しか停まらないこの駅は、平日の朝、十時ごろは乗客はまばらだ。

彼女は家にいてくれるだろうか。この春にも会いに行った。また秋にもお会いしようと言った。今日は突然の訪問だから会えないかもしれない。それはそれで仕方ない。良いお天気だ。少し足を伸ばせば、西教寺、日吉大社があった。

春の訪問のとき、彼女の家のすぐ目の前の公園を二人で歩いた。ベンチに座って歌った。

二人とも歌うことが好きで、そのことでも気が合っていて、桜の木の下で「さくら さくら」と合唱した。人がいなくて調子に乗ってしまつて大きい声で歌った。何曲も歌った。今日は「紅葉^{もみぢ}」にしようかな、「赤とんぼ」もいいな。

私は四十歳から自宅で数学塾を始めた。同じ系列の塾講師たちの勉強会が月に一回あった。その講師仲間の先輩が大津の友人だった。一五〇センチしか身長のない私よりも彼女は小さく、気さくで楽しい人だった。

「田中さん、この仕事は、縁の切れ目が金の切れ目やで。今日、にこにこして来た子が次の日にはもうやめまうと言うてくることは、しょっちゅうや。一人分の月謝が入ってこんなことになる。次の縁を待つしかない」

お互いに塾の経営をやめて二十年以上になるが、手紙や電話のやり取りを続けてきた。三年ほど前のこと、ハガキをもらった。

「今、バイトに行っています。娘がさがしてくれました」

その時、彼女は九十歳に近かった。私はすぐに電話した。

「仕事が見つかってよかったですね」

私は本当にそう思っていた。彼女が、何度か、夫の顔を一日中見ているのはしんどいと言葉を出していたからだ。私にもできる仕事なら教えてもらいたい。

「簡単なことや、家事みたいなこと。送り迎えしてくれるし、お風呂にも入ってくる」

えっそれってデイサービスのことでは。私はドキツとした。

「少しはお給料も入ってくるんや。いくらかは知らんけど。通帳は娘が管理しているから」

先輩、とぼけているの？本当にそう思っているの？

まあ、どちらでもよい。彼女が私の先輩であることにはまちがいない。彼女といると楽しいのだ。

電車がトラブルのため、五分ほど遅れるとのアナウンスが入った。私はほっと気が緩^{ゆる}んで、まわりを見た。少し離れたところに、若者が立っていた。スマホに見入っている。背が高い。前髪が目に入りそうだ。学生だ

ろう。そこに高齢の男性が駆け寄ってきた。

「おい、もう帰るんか」

「うん」

「ごはん食べたんか」

「ばーちゃんが作ってくれた」

この人はじーちゃんなのだろう。黒い毛糸の帽子から白髪が出ている。下は長靴である。あちこちに泥のひつついた長靴だ。畑から今、このホームに飛び込んだという格好だ。

私の前で、二人が重った。

「いらん、いらん」

孫が拒否している。じーちゃんは何か渡そうとしていた。お金だ、と私は察した。

「いらんから」

孫のきつぱりした声で、じーちゃんは引きさがった。私は心からの親しみを込めて、じーちゃんを見たが、彼は怖い表情を返してきた。どぎまぎして目をそらした。

「気をつけてな、また来いよ」

と言って、じーちゃんは去っていった。

まもなく電車が入ってきた。乗客たちは乗り込んだ。十分に座ることができた。

電車はすぐに動き出した。駅のロータリーに差しかった。「あつ」と思った。軽トラックがあつてその横でこちらを見ている人は先程のじーちゃんだ。黒い毛糸の帽子に泥の

ついた長靴。孫はどこと、電車内を見ると、反対席で相変らずスマホだ。

私はまたもや、じーちゃんに親愛の情が出てきて、手を振りそうになってしまった。

その時、この春、大津の友人がバス停まで見送ってくれたことを思い出した。バスが出発しても彼女は手を振り続けていた。小さい彼女がどんどん小さくなっていった。

きつと、今日、彼女に会えるに違いない。私はうきうきし始めて、電車の中であるのに歌い出してしまった。むろん小さい声にしておいたけれど。

（評）

思い立つて年長の友人を訪ねようとした筆者は、朝の駅のホームで見知らぬ祖父と孫のやり取りを目にする。筆者の穏やかな心持ちと深い洞察力をもって掬い取った日常のワンシーンがテンポの良い素直な文章で描かれる。滋味深い余韻を残す佳品。

入選

悠久の湖に生かされて

吉田和治

紺碧の湖は平らかに清く美しく、緑なす四方の山々は、春夏秋冬いずれを取っても、そ

れぞれに細やかな表情を現し、潤いに満ちた近江の国を造り上げた。

昭和二十年代頃より今日に至るまで、或一時期を除いては、私は琵琶湖の変遷を眺めて来たつもりであった。

名勝、千々の松原の北端は、当時入江に成っていて、水辺には葦が生い茂り、ボテジャコ・小鮎等が群をなし、たも網で追っ掛け「ガンゾ」と呼んでいた小鮎釣りを楽しむことが出来た。中でもテナガエビは十センチばかりの透けて見えるほどの美しい小魚だった。その俊敏な動作は子供には、手強い魚で随分難儀したが、これも古き良き時代の思い出の一コマで懐かしさがこみ上げる。

また、この浜は、粘土質の小砂と遠浅が相俟て、冬期の渇水期には驚くほど沖まで水が引く、転んでも滑っても怪我の心配のない絶好の簡易のグラウンドだった。

自転車を取り回すのにも、広大な砂浜は都合よく、水際をしぶきを上げて走る爽快感は琵琶湖を一人占めた気分となったのも、忘れ得ぬ思い出となった。

あれから幾年月が過ぎたろうか。遠目には、何十年経っても変らぬ碧く輝く湖であり、岸に寄せ来る波の音も、耳に優しく何一つ変りなく思った。

一方、視線を足元へと遣ると、湖は大きく変貌していた。鳥貝、蜆貝一つ目にする事はなかった。

あれほどあつた貝は一体何処へ行つたのか、余りの変りように、俄に信じる事は出来なかった。

昔、不用意に裸足で歩こうものなら、貝の欠片で怪我をすることも、珍しくはなかった。

それに引き換え、現実の砂浜は言葉を失う程の有様だった。

空き缶・ペットボトル・菓子袋等々、ゴミと云うゴミが打ち上げられ、或は無雑作に捨てられて、風にカラカラと弄ばれて、右へ左へ散乱して行く光景は儚く、悲しさだけが心に響いた。

或時等は、遙か汀の彼方に黒い物体が目に入った。恐る恐る近寄ると、一メートル以上もある猪が打ち上げられ、波に洗れていた。泳ぎ疲れて溺れ死んだのか、とりあへず、警察に知らせたが、タイミングが悪かったのか年の暮、少し迷惑そうな電話口、結局、年が明ければ対処しますと、それ迄お預けとなり、年を越す事になった。

これが人間だったなら、大騒動であつたらう、そう思うと見捨てられた猪が無性に不惑に思え、車に積んでいた、お墓参りの線香を

手向け少しでも供養せずには居れなかった。ブラウン管型のテレビが波を被り一部は既に埋もれかけていた。小砂が隙間に万遍なく詰り、ビクツとも動かなかった。

次に行つてみると、渚は何事も無つたかのように、波が騒いでいた。

今迄にも、砂に埋もれた丸太等、数多く見てきたが、別段、意に介する事も無かつた。

しかし、今回のテレビは心に引掛かるものがあり、気懸りだった。

以前、郷土誌を読んだ時の琵琶湖の成り立ちを思い出したからだつた。

それを読んで、波静かな湖からは凡そ考えも着かない地殻の運動があつたのだつた。

水の層が百メートル、その下に何と九百メートルの細い粘土層が岩盤に乗っているそうである。優に千メートルの深さがある。

琵琶湖には平野部の大・中・小の河川から膨大な土砂が流入している。大体の湖沼は土砂の流入によって埋つてしまふが、琵琶湖は、その所が違つて湖底に西岸断層帯が走つていて、大地震の度に沈下を繰り返し溜る土砂を吸収している様な事が書いてあつた。

正に奇跡としか言いようがない自然の賜である。私は瀬田川から排出される丈で十分だと思つていたが、断層は何万倍の土砂を岩盤

へと吸収して呉れたのだつた。

湖西の断層帯は急峻な湖岸を作り、毎年のように尊い命を水難事故で失っている。

一方、東岸はなだらかな遠浅の景観を余す所無く見せてくれ、鮎漁の助けにも成っている。

今回誰が捨てたのか分らない一台のテレビがぎつかけとなり、琵琶湖が単にそこにあるのではなく、大自然に我々が生かされている事を真摯に受け止めなければならぬ事を痛切に教えてくれた。

仮に何百年後に琵琶湖の堆積物を調べた人がいたら、急度、プラゴミとか私が見失つたテレビの残骸が出てこない事を願うばかりである。今からでも決して遅くはない、綺麗な湖を後世に手渡せるよう努力したいものである。

(評)

昭和二十年代から琵琶湖の変貌を眺めてきた筆者。子どもの頃の自然味あふれる浜辺の描写に読者は懐かしさを覚えるであろう。琵琶湖の成り立ちに伴う壮大な変貌と、人間による不法投棄など、ある種の荒廃ともいえる目に見える変貌の両面が丁寧に描かれた力作。

めんこいあの子

伏木 いろは

君との出会いは、蟬時雨が降り注ぐ保健室前の廊下。初夏の日差しを浴びて輝く君と目が合った瞬間、心を奪われてしまったんだ。

ああ、なんて可愛らしいのだろう。――
――赤べこ。

以前通っていた高校の、保健室前の廊下に赤べこが置かれていました。つぶらな瞳と、手のひらより小さいそのサイズ感に一目惚れしてしまい、気付いたら頭を触っていました。すると、頭がべこぺこ動き、びっくり！赤べこの実物を触るのが初めてだった私はその可愛さに夢中になりました。保健室登校だった私はよくその廊下を通っていたので、赤べこと戯れることを楽しんでいました。

持病の関係で高校を転校することになり、その赤べこもお別れすることになりました。出会って少しですが、たくさんの思い出があるの寂しかったです。お別れた後もあの赤べこを忘れることができず、時々見かけると買ってしまったくなる衝動に駆られました。買ったらいじやないかとあなたはお

思いになるでしょうが、本場の赤べこは値段が高く、それに、初恋の赤べこを超える子とは出会うことができなかったのです。

赤べことお別れてから一年半ほど経ちました。そろそろ赤べこがほしい：そう思っていた時、運命の出会いがありました。なんと、近所の書店に赤べこのガチャガチャがあつたのです！これはお迎えしなければと思いましたが、財布を持ってきていません。すると、一緒にいた父が三百円をくれました。

（お父さん、ナイス！）こうして、私は無事赤べこをお迎えすることができました。カプセルを開けるのに苦戦しましたが、やっと出会うことができた赤べこは初恋の子を超えるほどの可愛さです。私はこの子に「べこ蔵」と名づけ、これからたくさん可愛がる決心をしました。

べこ蔵は短い手足とつぶらな瞳、丸々としたボディが可愛い子で、一番の特徴は尻尾にしゅうまいがついているところ。もう一度言いますが、「しゅうまい」がついているのです。どう言うことかと言いますと、このガチャガチャのコンセプトが「中華」と「赤べこ」のようで、チャイナ服も着ています。これには、中華料理が大好きな私も大喜びです。ちなみに、尻尾のしゅうまいもぺこぺこ動きます。

べこ蔵とは、出会って一日ですが、いろいろなことをしました。一緒にドライブをしたり、お買い物に連れて行ったり。もちろん、今の文章を書いている私の横にもいてくれて、時々頭と尻尾を触らせてもらっています。「出会って一日」という一節でお気づきかもしれませんが、私はべこ蔵をお迎えした嬉しさのあまり、その日の晩にこの文章を書いています。そのくらい、喜びで満ちあふれているのです。

長年の片思いがついに実り、出会うことができましたべこ蔵は本当に可愛いくて、これからいろいろなところへ連れていこうと思っています。手始めに、明日のお昼は一緒に回転寿司です。

また、赤べこファンとして、福島県の本場の子もいつかお迎えしてみたいです。

これからも、べこ蔵とたくさん思い出を作っていききたいです。

（評）

高校の保健室の前の廊下に置かれた「赤べこ」と出逢った筆者は、その愛らしさに強く惹かれる。ですます調でしつかりと統一された文体が良い印象を残し、創作に対する真摯な姿勢と、筆者の若く瑞々しい感性が今後の可能性を感じさせる作品。

佳作

彦根藩を守った

家老・岡本黄石

伊藤眞雄



《総評》

本年度は九編の力作が寄せられました。

それぞれその作者にしか書けないテーマを基に独自の感性や文体で表現された世界が綴られていて、私たち選者は楽しみながら、学びながら、興味深く拝読しました。

その中でも今回の特選となった「見送る人」は選者全員一致の結果となりました。

随筆はひとりの人間の波乱に満ちた一生を書くこともできれば、何でもない日のほんの数分間の出来事を書くこともできます。

論説的な随筆、あるいは散文的な随筆、書きたい内容や作品世界を限られた紙枚でどういう味わいに仕上げるかは、作者の個性や好みによるものですが、その方法論は、日々継続的に読んだり書いたりするうちにしつかりと身に着いてくるものでしょう。

今回惜しくも選にもれた作品も僅差での結果であり、印象深い良い作品ばかりだったことを申し添えるとともに、応募いただいたみなさまの益々のご健筆をお祈りいたします。

山口 一